

原著

大学生の結婚観、および子育て観について

—自身の被養育体験、父母との関係性、対象関係に着目して—

井 梅 由美子¹⁾

Investigation of Views on Marriage and Child Rearing of University Students in Japan:
Study Based on Students' Experiences as Children and Their Interpersonal Relationships

Yumiko Iume

要 約

本研究では、大学生の男女が将来の自身の結婚や子育てに対してどのようなイメージを抱いているのか、どのような性役割観を持っているのか、実態について明らかにし、これらの結婚観・子育て観に影響を及ぼす要因として、幼少期および現在の父母との関係、父母の夫婦関係、自身の対人交流の仕方（対象関係）から検討した。調査対象は大学生男女380名である。はじめに、結婚観、子育て観の尺度を検討し、結婚観については「結婚への期待・肯定感」と「結婚への負担感」の2因子、子育て観では「子育てへの期待・肯定感」と「子育てへの不安感」の2因子が見出された。各尺度得点の性差を検討したところ、「結婚への期待・肯定感」と子育て観の2因子いずれも女性の得点の方が有意に高かった。次に、これらに影響している要因を検討し、女性では、現在の母親との信頼関係が結婚および子育てへの期待感につながっていた。また、男女ともに幼少期のアンビバレントな愛着パターンの得点の高さが結婚観、子育て観にネガティブな影響を与え、一方、女性では拒否的な愛着パターンの得点の高さはむしろ結婚、および子育てへの期待を高めていた。さらに、対象関係の下位尺度は様々な影響を与えており、総じて、幼少期の母子関係よりもむしろ、現在の人間関係における適応が結婚観、子育て観に影響を与えていることが推測された。

キーワード：大学生、結婚観、子育て観

1. 問題と目的

近年、わが国では少子化対策が喫緊の課題となっているが、その要因の1つとして、若者の未婚化、晩婚化が挙げられる（中橋, 2014）。国立社会保障・人口問題研究所による出生動向基本調査（2017）の結果をしてみると、初婚年齢は上昇を続けており、

2015年調査では、男性30.6歳、女性29.1歳となっている。また、未婚者の結婚への意識について、いずれは結婚しようとする未婚者の割合は男女とも8割以上と依然として高い水準にあるものの、異性の交際相手をもたない未婚者は上昇しており、男性69.8%、女性59.1%となっている。

性役割意識の変化や女性のライフスタイルの変化

1) 井梅由美子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) iume-yumiko@tokyomirai.ac.jp

に伴って、社会の結婚に対する意識も多様化し、また、職業選択についても従来の働き方とは違う選択を余儀なくされる場面も多い。終身雇用や正社員としての働き方が必ずしもスタンダードではなくなってきた昨今、若者にとってはますます職業選択や配偶者選択に迷いや困難が生じ、モラトリアムの時間が長引いているとも言えよう。男女雇用機会均等法の施行以降、女性の生き方が多様化し、女性のキャリア志向、社会進出への志向が高まってきたという見方がある一方で、むしろ現代の若い世代の女性は保守化する傾向にあり、結婚し、子育て中は家庭に入り、子育て後に仕事に復帰すると考えている女性が多いといった指摘もある（中井, 2000; 城島・白河・幸田他, 2012）。社会が急速に変化し、価値観も多様化する中で、現代の若者は親世代とは違う性役割観を持つ一方で、その影響も受けつつ、職場においても世代によってさまざまな性役割観が混在している。彼らがその中で、青年期から成人期へと移行し、職業選択や配偶者選択をしていくことは容易なことではないとも言えよう。

青年期を心理的発達課題の側面から見ていくと、Erikson (1982) がこの時期の発達課題としてあげたように、親から自立し、自らのアイデンティティを作り上げていく時期である。青年期に人は、同性の親しい友人との関係、さらには異性との恋愛関係といった親密な相手との交流を通して、これまでの価値観をもう一度見つめ直し、アイデンティティを確立していく。そして、青年期の次の発達段階である成人期には、他者との親しい関係を築いていく親密性を獲得すること（細野, 1997）、すなわち、仕事や家庭においてパートナーを探し、相互に調整をしながら新たな生活の場を築いていくことが求められる。結婚や出産、子育てといったライフイベントは、成人期の発達を考える上で大きな出来事の1つといえるが、青年期はその準備段階の時期とも言えるであろう。青年期にさまざまなものに自己投入し、自分らしさを積極的に探索すること、また、同性の親への同一視や異性の親とのやりとりを通して、将来、自

分が結婚をしたとき、どのような家庭を築いていくのか、配偶者とどのようなパートナーシップを築いていくのか、といった性的同一性を獲得していくことも重要な課題と言える（神村・鹿志村, 1997）。また、青年期に獲得されていく性的同一性は、それ以前の発達段階において育まれてきたものである。個々人が有している性役割観や結婚観は、幼少期からの養育者との関係性や、親夫婦の関係性をモデルとして、形作られていくと考えられる。山内・伊藤(2008)は、両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響について検討しており、両親の夫婦関係は、青年自身の恋愛関係とは独立に、結婚観に直接影響を与えることを示している。また、斎藤(2012)は、大学生を対象に親の夫婦関係と結婚の希望について検討しており、親がそろって外出することや、けんかが少ないことが大学生の結婚の希望を高めていることを見出している。親の夫婦関係は一番身近にある夫婦のモデルであり、青年の結婚観に影響をもたらすのであろう。さらに、世代間伝達という言葉にも示されるように、子育てにおいて自らの親との関係は自身の子育て観に影響を与えるであろう（渡辺, 2008）。

以上の観点から本研究では、はじめに、大学生の男女が将来の自身の結婚や子育てに対してどのようなイメージを抱いているのか、どのような性役割観を持っているのか、実態について明らかにすることを目的とする。二点目に、これらの結婚観・子育て観に影響を及ぼす個人的要因として、幼少期および現在の父母との関係性、父母の夫婦関係等家族の要因、さらには、自身の対人交流の仕方（対象関係^{注1}）から検討することとする。

注1) 対象関係とは、精神分析的治療理論において用いられる、個人の内にイメージされる自己と他者との関係性の取り方に関する表象のことを指す。私たちが他者と関わる際、心の内にある他者像(対象表象)と照らして、実際の目の前の相手を“このような人”と推測したり、自らの関わり方を調整したりしていると考えられる。それゆえ、この対象表象の持ち方が、警戒的な関わりをする人や、容易に他者と親しくなる人、あるいは依存的に

なる人など、様々なパターンとなって現れる。井梅・平井・青木・馬場（2006）では、対象関係を自己記入式の質問紙により評価することを目的として、尺度を作成している。

2. 方法

(1) 調査対象者

東京都内の私立大学に在籍する大学生380名（男性86名 $M=19.91$ $SD=1.27$ ；女性294名 $M=20.00$ $SD=1.21$ ）を対象に、以下の質問紙を実施した。

(2) 調査項目

a) フェイス項目

性別、年齢の他、将来の職業と子育てに関する意識について、以下の4つのうち、最も自分の考えにあてはまるものを選んでもらった。選択肢：1. 仕事を辞め、子育てに専念したい（してほしい）、2. 産休、あるいは育休後、仕事復帰したい（してほしい）、3. 子どもが大きくなってから仕事復帰したい（してほしい）4. パートナー（夫、あるいは妻）の意見を尊重する。

b) 結婚に対する意識尺度

大学生の結婚に対する意識を検討するため、竹原・三砂（2006）による結婚観尺度を参考に、項目を作成した。なお、竹原・三砂（2006）の尺度では項目数が多く、子どもに関する項目を含むなど結婚観の概念を広く捉えているが、本研究では使用できる項目数が限られていたことから、結婚に対する肯定的な感情、および消極的、否定的な感情に焦点を絞り、8項目を使用することとした。

c) 子育てに対する意識尺度

大学生の子育てに対する意識を検討するため、子育て世代を対象とした育児不安に関する尺度（ex. 荒牧, 2008）を参考に、将来を想定する形で質問項目を作成した（「子どもが泣いたら、どうしたら良いか分からなくなると思う」など）。また、子育てに対する不安だけではなく、肯定的感情も見つかったことから、子育てに対する肯定的意識や期待感を測定

する項目を作成し、追加した。計8項目からなる。

d) 平等主義的性役割態度尺度

性役割について現在の大学生がどのような意識を持っているかを測定するため、鈴木（1994）による平等主義的性役割態度スケールを用いた。なお、鈴木（1994）の尺度は15項目からなるが、項目数を減らすため、鈴木（1994）の想定する3つの下位領域（結婚・男女観、職業観、教育観）から、それぞれのバランスについて考慮し8項目を選択した。

e) 就学前の母子関係尺度

酒井（2001）による就学前の母子関係に関する項目を用いた。この尺度は、Ainsworth et al.（1978）の幼少期の母子関係における、独立した3つの愛着パターン（記述を参考に作成されており、「就学前の安定的な母子関係」「就学前の拒否的な母子関係」「就学前のアンビバレントな母子関係」）の3因子からなる。質問項目は16項目を使用した。

f) 父母との信頼感に関する項目

酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）による、父母との信頼感尺度を用いた。父親との信頼感に関する質問4項目、母親との信頼感に関する項目4項目の計8項目からなる。なお、酒井他（2002）では、中学生を対象としていたことから、「お母さん」を「母」に変えるなど、大学生に相応しいように表現を修正している。

g) 両親の仲の良さ

柏木・平山（2003）による結婚の現実尺度などを参考に、両親の仲の良さを尋ねる質問項目を作成した。父母それぞれの視点から、「母（父）は父（母）のことを大切にしていた」、「私の父（母）親は幸せな結婚生活を送っていたと思う」と尋ね（ 2×2 の4項目）、また、「両親の仲は良かった」かを尋ね、計5項目とした。

h) 対象関係尺度

井梅他（2006）によって作成された尺度を用いた。5下位尺度29項目からなる。5つの下位尺度名とその尺度で測定している内容を（ ）内に示した。①親和不全（自ら壁を作り、他者と深くつきあうこと恐

表1 結婚に対する意識尺度の因子分析結果

項目	因子		共通性
	I	II	
家族団らんのある家庭を作れると思う。	.772	-.144	.618
何でも言えて、相談できるような家族関係を作れると思う。	.710	-.196	.508
結婚願望は高い方だ。	.702	-.263	.492
結婚はしなくてもよい。	-.673	.410	.484
結婚しても離婚するかもしれない。	-.593	.396	.389
結婚すると、自分のやりたいことが制限されてしまう。	-.269	.832	.693
結婚は何かを犠牲にすることだと思う。	-.308	.819	.671
因子間相関	因子 I	-.363	

表2 子育てに対する意識尺度の因子分析結果

項目	因子		共通性
	I	II	
将来、自分が母親（父親）になる姿を想像するとワクワクする。	.867	-.035	.768
将来、自分の子どもの世話をするのが楽しみである。	.856	-.172	.831
将来、自分が親になることを想像することはよくある。	.727	.167	.500
子どもを抱くと幸せな気持ちになると思う。	.495	.107	.233
子どもの相手をするのは疲労がたまると思う。	.097	.708	.479
子どもがいると、自分のしたいことができなくなると思う。	.091	.596	.338
子どもが泣いたら、どうしたら良いか分からなくなると思う。	-.078	.556	.335
因子間相関	因子 I	-.229	

れる傾向)、②希薄な対人関係(身近な人との相互理解やサポートの授受など、信頼のおける交流が困難な傾向)、③自己中心的な他者操作(自己中心的な心性が根底にあり、自分のために他者が動いてくれることを当然と考える傾向)、④一体性の過剰希求(自分にとって身近な人との同一視の傾向)、⑤見捨てられ不安(親しい人から拒絶の恐れや相手の反応への過敏さ)。

以上、b) から h) の尺度については全て、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の6件法で評定を求めた。

(3) 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、調査の趣旨を説明し、回答は自由意志であること、匿名性が保たれること等を口頭および文書で伝え、これに同意したものが回答した。また、本研究は、筆者の所属大学の研究倫理審査委員会において承認を受けた。

3. 結果

(1) 各尺度の検討

a) 結婚に対する意識尺度の因子分析結果

結婚に対する意識尺度の8項目について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行ったところ、2因子が抽出された。2因子での累積寄与率は55.07%であった。因子抽出後の共通性が.20に満たない1項目を除外して再度因子分析を行い、表1の通りの結果を得た。

第1因子は、「家族団らんのある家庭を作れると思う」、「何でも言えて、相談できるような家族関係を作れると思う」など、結婚に対する期待感や肯定的感情に関する5項目を採用し、「結婚への期待・肯定感」と命名した。第2因子は、「結婚すると、自分のやりたいことが制限されてしまう」など2項目を採用した。結婚することにより負担が増えると感じていることから、「結婚への負担感」と命名した。信

頼性の検討のため、クロンバックの α 係数を算出したところ、「結婚への期待・肯定感」では $\alpha = .81$ 、「結婚への負担感」では $\alpha = .82$ であった。

b) 子育てに対する意識尺度の因子分析結果

子育てに対する意識に関する8項目について、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ、2因子が抽出された。2因子での累積寄与率は49.76%であった。因子抽出後の共通性が.20に満たない1項目を除外して再度因子分析を行い、表2の通りの結果を得た。

第1因子は「将来、自分が母親（父親）になる姿を想像するとワクワクする」、「子どもを抱くと幸せな気持ちになると思う」など、子どもを持つことへの期待感や肯定感を示している4項目を採用し、「子育てへの期待・肯定感」と命名した。第2因子は、「子どもの相手をするのは疲労がたまると思う」など、子育てに対する不安に関する項目3項目を採用し、「子育てへの不安感」と命名した。信頼性の検討のため、クロンバックの α 係数を算出したところ、「子育てへの期待・肯定感」では $\alpha = .82$ 、「子育てへの不安感」では $\alpha = .64$ であった。

c) 両親の仲の良さ尺度の因子分析結果

両親の仲の良さに関する5項目について、因子分析（主因子法）を行った結果、第1因子で全分散を説明する割合は82.89%であったことから、1因子で使用する事とした（表3）。クロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .96$ であった。

d) その他の尺度の検討

父母への信頼感、就学前の母子関係に関する項目、

および対象関係尺度については、すでに因子の構造について検討がなされていることから（酒井, 2001; 酒井他, 2002; 井梅他, 2006）、信頼性の検討を行い、分析に用いる項目を決定した。

はじめに、父母との信頼感について、「父親との信頼感」は、「あなたは、父に何でも話せますか」など4項目にて α 係数を検討し、 $\alpha = .92$ であったことから、そのまま4項目を採用することとした。「母親との信頼感」についても、4項目にて $\alpha = .90$ であったことから、4項目全てを採用することとした。

次に、就学前の母子関係について、「就学前の安定的な母子関係」は、「私は母親のそばでは安心感があった」など5項目を採用した（ $\alpha = .89$ ）。「就学前の拒否的な母子関係」については、「私が泣いていても、母親は関心がなかった」など5項目を採用した（ $\alpha = .81$ ）。「就学前のアンビバレントな母子関係」では、「母親が出かける時には、むりやりついて行こうとした」など4項目を採用した（ $\alpha = .66$ ）。

最後に、対象関係尺度について、5つの因子それぞれのまとまりを検討し、「親和不全」6項目で $\alpha = .85$ 、「希薄な対人関係」5項目で $\alpha = .81$ 、「自己中心的な他者操作」5項目で $\alpha = .76$ 、「一体性の過剰希求」6項目で $\alpha = .80$ 、「見捨てられ不安」7項目で $\alpha = .89$ と十分に高い α 値が得られたことから、この5因子をそのまま用いることとした。全ての尺度について、項目平均値を各尺度得点として以下の分析で用いることとする。

なお、性役割観の検討のために用いた平等主義的性役割態度尺度であるが、8項目でのまとまりを検

表3 両親の仲の良さ尺度の因子分析結果

項目	因子	
	I	共通性
私の母親は幸せな結婚生活を送っていたと思う。	.931	.867
両親の仲は良かった。	.922	.849
父は母のことを大切にしていた。	.916	.839
私の父親は幸せな結婚生活を送っていたと思う。	.909	.827
母は父のことを大切にしていた。	.873	.763

表4 結婚／子育てに対する意識尺度の男女別平均値と標準偏差

	男子 (n=86)	女子 (n=294)	t値
結婚に対する意識			
結婚への期待・肯定感	3.99 (1.07)	4.28 (1.03)	2.26*
結婚への負担感	4.03 (1.28)	3.90 (1.17)	0.95
子育てに対する意識			
子育てへの期待・肯定的意識	4.32 (1.10)	4.78 (0.99)	3.74**
子育てへの不安意識	3.51 (0.98)	3.78 (0.91)	2.38*

() 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$

討したが、因子分析、信頼性分析による検討の結果、1つの因子としてまとめることは困難であった。しかしながら、現在の大学生の性役割への意識を知る上で、それぞれの項目得点のばらつきが有用と考えられたので、8項目の得点を合成得点とはせずに、そのまま検討することとした。

(2) 結婚、子育てに関する男女の意識

a) 結婚／子育てに対する意識尺度の性差の検討

結婚に対する意識尺度、および子育てに対する意識尺度の各尺度得点について、男女でどのような認識の差があるかを検討するため、 t 検定にて各尺度得点の差を検討した。結果を表4に示す。

結婚に対する意識尺度では、「結婚への期待・肯定感」で有意差が見られ ($t(377) = 2.26, p < .05$)、男性よりも女性の得点が高かった。子育てに対する意識尺度ではいずれも有意差が見られ、「子育てへの期待・肯定感」では、女性の得点が高く ($t(375) = 3.47, p < .01$)、「子育てへの不安感」についても女性の得点の方が高かった ($t(377) = 2.38, p < .05$)。

b) 将来の仕事と子育てについての意識

フェイス項目にて、将来、子どもを持ったときの仕事に関する意識について、最も自分の考えにあてはまるものを選んでもらった。選択肢は、「1. 仕事を辞め、子育てに専念したい (してほしい)」、「2. 産休、あるいは育休後、仕事復帰したい (してほしい)」、「3. 子どもが大きくなってから仕事復帰したい (してほしい)」、「4. パートナー (夫、あるいは妻) の意見を尊重する」の4つのうち、最も自分の考えにあうものを選ぶ形式である。

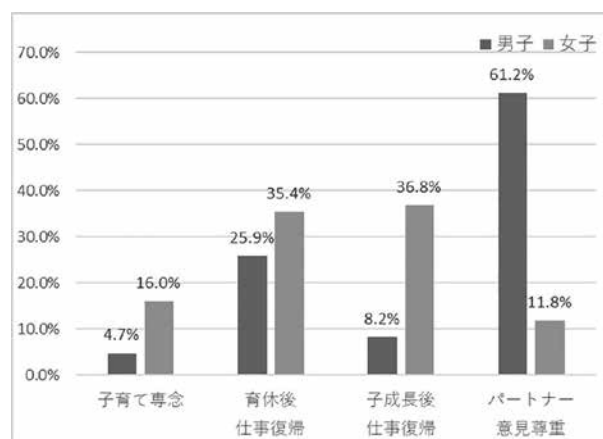


図1 将来の仕事と子育てについての意識 (男女別)

男女それぞれの結果を図1に示す。男女で選択した内容に差があるかを検定するため、 χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2=95.08, df=3, p < .0001$)。残差の検討を行い、最も有意な差が見られたものは、「4. パートナー (夫、あるいは妻) の意見を尊重する」であった。男性の61.2%がこの選択肢を選択しているが、出産については女性が当事者であるから、男性に「パートナーの意見を尊重する」が多くなることは当然であろう。そこで、「4. パートナー (夫、あるいは妻) の意見を尊重する」の選択肢を除いた3つの選択肢で男女の選択の違いを検討した。 χ^2 検定の結果、有意であった ($\chi^2=8.48, df=2, p < .05$)。残差の検討を行ったところ、「2. 産休、あるいは育休後、仕事復帰したい (してほしい)」については男性が選んでいる傾向が高く、「3. 子どもが大きくなってから仕事復帰したい (してほしい)」については、女性が多く選択していることが分かった (表5)。

表5 将来の仕事と子育てについての意識（パートナー意見尊重除く）

		子育て専念	育休後 仕事復帰	子成長後 仕事復帰	合計
男性	度数	4	22	7	33
	(%)	(12.1%)	(66.7%)	(21.1%)	(100.0%)
女性	度数	46	102	106	254
	(%)	(18.1%)	(40.2%)	(41.7%)	(100.0%)

c) 性役割観に関する項目

鈴木（1994）による平等主義的性役割態度スケールの8つの項目の得点について、男女それぞれの平均値の差を検討したところ、4つの項目で有意差が見られた（表6）。

「家事は男女の共同作業となるべきである」、「子育ては女性にとって一番大切なキャリアである」、「女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である」の3項目については、男性よりも女性の得点が有意に高かった。一方、「経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい」については、男性の得点が有意に高いという結果となった。また、8つの項目のうち、男女ともに最も高い値を示しているのが「家事は男女の共同作業となるべきである」であり、一方、「女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である」、「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」といった項目は男女ともに低い値となっていた。

(3) 結婚観・子育て観に関連する要因

大学生の結婚に対する意識、および子育てに対する意識に影響を与えている要因について検討するため、結婚観、子育て観のそれぞれの尺度を目的変数、父母との信頼感、両親の仲の良さ、就学前の母子関係、対象関係の各下位尺度得点を説明変数とし、重回帰分析（強制投入法）を行った。なお、各尺度得点に男女差が見られたことから、それぞれに違った関連が見られると想定し、男女それぞれ分析することとした。

結婚観の2下位尺度、子育て観の2下位尺度それぞれを目的変数にモデルを検討したところ、結婚観については、「結婚への期待・肯定感」にて男女ともにモデルが有意であった（男性 $F(11, 58) = 6.39, p < .01$ ；女性 $F(11, 258) = 15.13, p < .01$ ）。また、子育て観については、「子育てへの期待・肯定感」について男女ともにモデルが有意であった（男性 $F(11, 58) = 2.97, p < .01$ ；女性 $F(11, 257) = 12.13, p < .01$ ）。モデルが有意であった2つの尺度について、

表6 平等主義的性役割態度スケールの各項目の男女別平均値と標準偏差

	男子 (n=86)	女子 (n=294)	t値
女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である。	2.73 (1.28)	2.59 (1.33)	0.89
家事は男女の共同作業となるべきである。	4.29 (1.26)	4.63 (1.04)	2.55*
子育ては女性にとって一番大切なキャリアである。	3.28 (1.23)	3.80 (1.28)	3.38**
女性はこどもが生まれても、仕事を続けた方がよい。	3.59 (1.04)	3.54 (1.13)	0.39
経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。	4.08 (1.21)	3.70 (1.21)	2.58*
女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である。	3.57 (1.16)	4.01 (0.97)	3.17**
男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。	3.33 (1.38)	3.17 (1.34)	0.96
結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。	2.62 (1.18)	2.40 (1.18)	1.51

() 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$

影響を与えている因子を検討していく。なお、多重共線性について確認したところVIF値が5を超える値は見られなかった。

はじめに、「結婚への期待・肯定感」に与える影響について、男性では、「就学前のアンビバレントな母子関係」および、「親和不全（対象関係）」が低いほど、そして、「一体性の過剰希求（対象関係）」が高いほど、結婚への期待・肯定感が高いことが分かった。一方、女性では、「母親との信頼感」、「就学前の拒否的な母子関係」、「見捨てられ不安（対象関係）」が高いほど結婚への期待・肯定感が高まり、「就学前のアンビバレントな母子関係」、「親和不全（対象関係）」、および「希薄な対人関係（対象関係）」の得点が低いほど、結婚への期待・肯定感が高くなることが分かった。

次に、「子育てへの期待・肯定感」に与える影響を検討していくと（表8）、男性では、「就学前のアンビバレントな母子関係」が低いほど、肯定的な子育て意識を持っていることが分かった。一方女性では、「母親との信頼感」、「就学前の拒否的な母子関係」、「見捨てられ不安（対象関係）」が高いほど、

表7 「結婚への期待・肯定感」に与える影響

	男子	女子
	β	β
母との信頼感	.123	.225**
父との信頼感	-.099	.053
両親の仲の良さ	.291	.082
就学前の母子関係		
安定的な母子関係	.085	.027
拒否的な母子関係	.163	.284**
アンビバレントな母子関係	-.363**	-.117*
対象関係		
親和不全	-.517**	-.362**
希薄な対人関係	-.171	-.353**
自己中心的な他者操作	-.200	-.110
一体性の過剰希求	.367**	.102
見捨てられ不安	-.059	.295**
調整済 R^2	.462**	.366**

* $p < .05$ ** $p < .01$

表8 「子育てへの期待・肯定感」に与える影響

	男子	女子
	β	β
母との信頼感	.060	.206**
父との信頼感	.175	.070
両親の仲の良さ	.010	.022
就学前の母子関係		
安定的な母子関係	.187	.006
拒否的な母子関係	.158	.180*
アンビバレントな母子関係	-.351*	-.072
対象関係		
親和不全	-.339	-.332**
希薄な対人関係	-.177	-.356**
自己中心的な他者操作	-.081	-.065
一体性の過剰希求	.246	.060
見捨てられ不安	-.005	.297**
調整済 R^2	.239**	.314**

* $p < .05$ ** $p < .01$

そして、「親和不全（対象関係）」と「希薄な対人関係（対象関係）」の得点が低いほど、肯定的な子育て意識を持っていることが分かった。

4. 考察

本研究では、大学生を対象に将来の結婚、および子育てへの意識と、それに影響を与える要因について検討した。以下ではそれぞれについて考察していくが、はじめに、今回の研究の対象者について触れておく。今回の調査は、心理学、および保育学/教育学を専攻する大学生を対象に調査を行っており、日頃より少子化等子どもに関する問題や、子どもの発達等にある程度知識のある学生である。また、保育学/教育学の専攻では保育士や幼稚園・小学校教諭の免許を取得できることから、子どもに関わる職業を将来希望している学生も多い。そのため、結婚や子育てについての意識が一般の大学生と異なる部分もあるかもしれないが、そうした前提のもと、分析をしていく。

(1) 大学生の結婚、子育てに対する意識

結婚に対する意識について、「結婚への期待・肯

定感」、および「結婚への負担感」の2因子が見出され、それぞれの得点の男女差を検討した。その結果、「結婚への期待・肯定感」で男性よりも女性の得点が高く、女性の方が結婚に対する肯定的な意識、あるいは期待感を持っていることが推測された。一方、「結婚への負担感」については、有意な差は見られなかったものの、男性の得点の方が高い傾向が見られた。また、2つの因子の得点を見てみると、概ねどちらも4点前後であり、結婚への期待感、肯定感と負担感が同程度に存在することが推測された。その中で、女性にとってはやや期待の方が勝り、男性にとってはやや負担感の方が勝るということであろうか。

次に、子育てへの意識を見てみると、「子育てへの期待・肯定感」と「子育てへの不安感」のどちらも女性の得点の方が高かった。子育てに対する意識は、女性の方がより具体的に持っており、だからこそ期待感も大きい不安感も大きいことが推測される。

さらに、フェイス項目にて、将来の仕事と子育てについての意識について尋ねた内容と、鈴木(1994)の尺度をもとに尋ねた性役割観について検討していく。はじめに、将来、子どもが出来たときに仕事をどうするかについて、出産といったライフイベント自体は女性特有のものであるため比較は難しいが、女性の回答を見てみると、子どもの成長後に仕事復帰を考えている人が最も多く、いわゆるM字型就労と言われる特徴を示していると考えられる。女性の理想のライフコースについて過去20年間のデータを比較した出生動向基本調査報告(2017)では、専業主婦希望が1990年代に減少し、その後横ばいであるのに対し、仕事と子育ての両立希望は現在まで緩やかに上昇している(子育て後の再就職希望は横ばいかやや上昇)。また、2015年調査で3つのうち最も選ばれているのは再就職希望で今回の調査結果と一致する(再就職34.6% 両立32.3%)。再就職希望は過去20年間、常に最も高い割合で選ばれており、女性の描くライフコースとして長く定着した形である

ことが推測されるが、20年前に比較すると、再就職と両立の差は縮まって来ている。一方、男性では、6割以上が「パートナーの意見を尊重する」を選んでいるものの、残りの回答では、育休後に仕事に復帰することを望む声が多かった。この男女差をどう見るか、「パートナーの意見を尊重する」を除く男性の人数が少ないことから、解釈には慎重であるべきだが、男性の方が結婚に対して経済的な不安を感じているため、パートナーの女性の仕事復帰を望むのであろうか。前述の出生動向基本調査報告(2017)では、男性が望むパートナーのライフコースについて、男性も女性と同様、再就職希望が最も多く選ばれており、今回の調査と異なる結果が見られている。男性の今回の結果については、調査対象の特殊性の可能性も否定できないため、これ以上の考察はここでは控えたい。

次に、性役割観に関する質問項目への回答を見てみると、「女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である」や「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」といった伝統的な性役割観を反映するような項目については、男女ともに低い値を示しており、彼らの価値観が変容してきていると見ることもできる。しかしながら、「子育ては女性にとって一番大切なキャリアである」については、男女の有意差が見られ、特に女性の得点が高かった。伝統的な性役割観は変容してきている一方で、「子育ては女性の仕事」といった考えも同時に併せ持っていることが推測される。また、男性では、「経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてよい」の値が女性に比べて有意に高く、「一家の主な稼ぎ手は男性」という意識を持っていることが推測される。しかし、昨今の経済事情から男性1人で家計を支えることに不安も感じることから、「育休後に仕事復帰して欲しい」と望む声も多いのであろう。城島ら(2012)は、女子大学生の職業観と結婚観について調査しており、現在の女子大学生にとって伝統的な性役割観は薄れてきているものの、「男性が一家を養う」という価値観は依然としてあり、なおかつ、

昨今の経済事情によりそれが困難になってきていることから、高収入の男性がパートナーの選択対象として集中し、非婚化が進むと指摘している。今回の調査においてもそうした傾向は見られ、結婚生活については男女平等的な価値観を志向するものの、一家の主な稼ぎ手は男性、子育てについては女性が中心に担うものという考え方は依然根強いことが伺われた。現在の大学生が成長してきたここ十数年は、社会における性役割意識の変化も激しく、加えて経済事情の変化も激しい。今回の調査における平等主義的性役割態度尺度の得点のバラつきからも、彼らの性役割における平等意識がさまざまなレベルで存在することが推測された。

(2) 結婚観、子育て観に影響を与える要因

大学生の結婚に対する意識、および子育てに対する意識に影響を与えている要因について検討するため、父母との信頼感、両親の仲の良さ、就学前の母子関係、対象関係を説明変数として分析を行った。

はじめに、「結婚への期待・肯定感」について、男性では、「就学前のアンビバレントな母子関係」および、「親和不全（対象関係）」が低いほど、そして、「一体性の過剰希求（対象関係）」が高いほど、結婚への期待・肯定感が高いことが分かった。幼少期に母親との関係で母親の不在に不安を感じる等不安が強いほど、結婚への期待・肯定感が低いことが伺われる。また、対象関係の側面から見ていくと、他者と深くつきあうことに困難を感じる傾向が強い人ほど結婚への期待を低め、身近な人との一体感を強く求める人ほど結婚への期待が強いことが分かる。なお、今回の調査で男性は、現在の父母との信頼感、両親の仲の良さについては影響が見られなかった。一方女性では、母親との信頼感が高いほど結婚への期待が大きく、幼少期の母親との関係で母親にアンビバレントな感情を抱いていたことは結婚への期待を低めていた。さらに、幼少期の拒否的な母親の関わりは結婚への期待を高めていることが分かった。幼少期に母親が拒否的であり、良好な関係ではなかったことは、女子青年の結婚への期待を低めると

予想していたが、今回の調査の結果は予想と異なり、結婚への期待を高めていた。幼少期の母親の拒否的な態度に対して、むしろ母親との関係を諦め、自分自身の家庭を作ることへの期待感へと繋がるのであろうか。対象関係の側面から見ていくと、男性と同じく他者と深くつきあうことに困難を感じる人、さらに、身近な人との信頼のおける交流ができていない人ほど結婚への期待を低め、一方で、見捨てられ不安の高さは結婚への期待を高めていた。

次に、「子育てに対する期待・肯定感」について、男性では、結婚観と同様、幼少期の母親との関係で不安が強いほど、子育てへの期待・肯定感が低いことが伺われる。他に有意な影響があるものはなかったが、男性については人数が少なかったこともあり、今後さらなる検討が必要であると考えられる。女性では、母親との信頼感が高いほど子育てについても期待・肯定意識が強く、一方で、幼少期の拒否的な母親の関わりの高さも子育てへの期待を高めていることが分かった。結婚観と同じく、自身の母親への諦めが新しい家族への期待とつながったのであろうか。対象関係については、他者と深くつきあうことに困難を感じる人、身近な人との信頼のおける交流ができていない人ほど子育てへの期待を低め、一方で、見捨てられ不安の高さは子育てへの期待も高めていた。

以上、結婚観、および子育て観に与える要因について男女別に検討し、女性では、現在の母親との信頼関係が結婚および子育てへの期待感につながるが見られ、身近なロールモデルである母親との良好な関係は、女性の結婚、子育てへの適応も高めることが推測された。

一方、幼少期の母親との関係では、不安定な愛着パターンである2つの尺度のうち、アンビバレントな母子関係は結婚観、子育て観にネガティブな影響を与えていたが、拒否的な母親の態度は、むしろ期待を高める方向に影響していた。愛着スタイルの世代間伝達については、現在の子どもとの愛着パターンと幼少期の母親との愛着パターンは関連するとも言

われているが(数井・遠藤, 2005)、今回の調査の結果では、大学生時点では少なくとも、母親の拒否的な態度は反面教師的な働きになるのか、結婚、子育てに対して肯定的意識を持っていることが分かった。ただし、実際に結婚したとき、あるいは子どもを持ったときに、期待および肯定的意識がそのまま持続するかについてはさらなる検討が必要である。また、対象関係の下位尺度は様々な影響を与えており、あわせて考えると、幼少期の母子関係の影響もさることながら、現在の人間関係においての適応が結婚観、子育て観に影響を与えていることが推測される。

文 献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of Attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum
- 荒牧美佐子(2008). 幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化 家庭教育研究所紀要, 30, 139-149.
- Erikson, E.H.(1982). The Life Cycle Completed: A Review. W.W. Norton. (村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル、その完結 みすず書房)
- 細野正美(1997). 成人期-家庭人として 馬場禮子・永井徹編 ライフサイクルの臨床心理学 培風館 155-171.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子(2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究, 14(2), 181-193.
- 神村富美子・鹿志村和子(1997). 思春期: 後期-高校生 - 馬場禮子・永井徹編 ライフサイクルの臨床心理学 培風館 95-107.
- 柏木恵子・平山順子(2003). 結婚の”現実”と夫婦関係満足度との関連性-妻はなぜ不満か- 心理学研究 74(2) 122-130.

- 数井みゆき・遠藤利彦(2005). アタッチメント-生涯にわたる絆- ミネルヴァ書房
- 国立社会保障・人口問題研究所(2017). 現代日本の結婚と出産-第15回 出生動向基本調査(独身者ならびに夫婦調査) 報告書-
http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf (2018.10.20アクセス)
- 中橋美穂(2014). 家庭とは何か? 小田豊・日浦直美・中橋美穂編 家庭支援論 北大路書房
- 中井美樹(2000). 若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観 立命館産業社会論集 36 117-127.
- 城島博宣・白河桃子・幸田達郎・城佳子(2012). 女子大学生の結婚観と職業観の調査 生活科学研究 34, 149-158.
- 酒井厚(2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係-内的作業モデル尺度作成の試み- 性格心理学研究 9(2), 59-70.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞築城和美・菅原健介・北村 俊則(2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究 50, 12-22.
- 鈴木淳子(1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- 竹原健二・三砂ちづる(2006). 「結婚観尺度」の作成 民族衛生 72(6) 225-233.
- 齋藤嘉孝(2012). 定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与える影響 法政大学キャリアデザイン学部紀要 9 369-379.
- 渡辺久子(2008). 子育て支援と世代間伝達-母子相互作用と心のケア- 金剛出版
- 山内星子・伊藤大幸(2008). 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響-青年自身の恋愛関係を媒介にして- 発達心理学研究 19 294-304.

(いうめ ゆみこ)

【受理日 2018年10月9日】